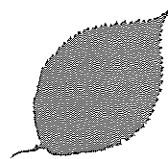


序章

共同幻想のゆくえ

播磨 靖夫



一人ひとりの願いの集積

ここにおさめられている物語は、「現代の神話」といえるかもしれない。一つひとつは小さく見えるけれども、総合してみると私たちの前に生命を織り成す物語として立ちあらわれてくる。

これまで私たちは、数々の神話をつくりだしてきた。たとえば、「経済成長」という神話。「科学技術の進歩」という神話……。今まで神話は、国家によって恣意的につくられる物語のように考えられてきた。また、マスコミを通じて強制的に押しつけられる物語というイメージが強くあった。

たしかに過去にそういった時代もあったが、ほんらい神話は、その時代に生きている一人ひとりの願いの集積にはかならない。人々が何か一つのことを価値として共有すると共同幻想となってくる。その時代時代の共同幻想が神話ということができる。

ここにまとめられた「現代の神話」は、私たちが長い歳月をかけてつくりだした共同幻想の集大成ともいえるだろう。それは「人間の棲み家」づ

くりにはじまり「生命の樹のある場所」づくりにいたる、連めんと続く物語である。

ふつう「人間の棲み家」というと文字通り家（家屋）をさすが、私たちはただだたんに狭い意味での家に棲んでいるわけではない。町のなか、村のなか、森のなか、山のなか、そして鳥のなかに広く棲んでいる。

私たちはそこに「棲み家」をつくり、生きる場を築いてきた。これは私たちが、個人的にも社会的にもみずからの行為や関係を空間化し、空間化することで自己を表現する能力をもっていることを示している。

ここで語られる物語は、長年取り組んできた障害のある人たちの生きる場づくりという行為が、空間として構造化されていった物語でもあり、生きる場づくりの展開が社会化されていった物語でもあるといえるだろう。

物語の数々の集合は、青々としげる「生命の樹」にたとえることができる。その「生命の樹」は、一本の巨木のように見える。そして物語の数々は、一つひとつ完結し独立しているのではなく、開かれたかたちで相互につながっている。葉っぱは枝から出て、枝葉は幹と一体となっているよう

に。

このような物語を理解してもらうには、一つひとつの物語を関連する物語のテキストの一部として視野に入れてもらわなければならない。また、このようなテキストを生み出す場所についても知ってもらわなければならない。

開かれたやさしい存在

財団法人たんぼの家は、2003年8月4日、創立27周年を迎えた。思いおこすと今から28年前、高度経済成長からおきざりになった障害のある人たちの問題と取り組むために小さな財団を設立した。その当時は市民活動を社会福祉法人化することはむずかしく、福祉という公共の新しい担い手として「市民法人」というものを構想したのがはじまりだった。

私たちが考えた「市民法人」というのは、いろんな立場や、いろんな生活史をもった人々が、障害者問題をはじめ社会のさまざまな問題を市民課題として取り組む公益組織のことだった。今でいえばNPO（民間非営利

組織）にあたる。そしてその後、私たちの活動は財団法人として認可されたが、その理念や心構えは今も「市民法人」であることに変わりはない。

これまでに私たちは「障害」を通して、さまざまなことを考え続けてきた。また、さまざまな実験を試みてきた。この実験と失敗の歴史が「一にして多、多にして一」という多元的、多重的、多義的な活動を次々と生みだしてきたといえるだろう。

最初は、障害のある人たちの自立の家づくりと福祉風土づくりをめざして出発した。そのことについては、「たんぼ」の運動16年の記録『花になれ風になれ』^{*}にくわしくまとめている。

それは「人間は開かれたやさしい存在でありたい」という一人ひとりの願いからはじまっている。他人ごとを自分のこととして身につまされて感じることができたら——つまり「やさしさ」が私たちの活動の基調となっている。

それは疎外された社会的個人を「共感」という方法でとらえるところから生まれてきたといえるだろう。そして、このような感情を触媒にして、

* 『花になれ風になれ』
「たんぼ」の運動を記録する会編、90年、財団法人たんぼの家

共同幻想を実現するための新しいつながりをつくり続けてきたのである。

そこから生まれた「たんぼほの家」とは、障害のある人たちにとって、生存したいという欲求をみだす可能な手段の集まりであった。また、生存という目的を実現するための欠くことのできない手段を提供してくれるところでもあった。

なかでも、障害のある人たちの生存のための条件を広げると同時に、主体的に選択できる生き方¹¹自由を広げることを目指してきた。それが「個の実現」を支え、あう新しいコミュニティづくりへと展開していった。

新しい知の地平

私たちの活動の「やさしさ」は「共感」を呼びおこし、その「共感」が私たちの活動のイメージをつくり、たくわえられたイメージがバネとなつてより大きな「共感」を得るといふ、極めてダイナミックな発展をとげてきた。

しかし、こうした「やさしさ」や「共感」だけで発展したわけではな

い。社会的実践の知のパラダイム（枠組み）として「プリコラージュ」という対話的―共感的な活動様式をとったことも大きな要因だと考えている。それは「新しい知の地平」を切り拓く実践といってもいいだろう。

「プリコラージュ」というのはフランス語の「日曜大工」のことで、英語の「DIY(ドゥー・イット・ユアセルフ)」にあたる。

一般的に「器用仕事」と訳されているが、身近にあるありあわせの道具材料を使って自分の手でものをつくる手づくりのことである。このありあわせの道具材料とは、いずれまた何かの役に立つと見なされ、とっておかれたものの集まりであるから、一見雑多でまとまりがない。さらに、それらが有用かどうかはすぐにわからないため、特定の用途に限定されていない。けれども、具体的に潜在的ないくつかの関係に向かって開かれているものである。

この「プリコラージュ」の特徴は、限られた可能性のなかで選択することによって、つくり手の性格とか人生を語ることができることである。つねにつくり手の何がしかを「作品」のなかに残すことができるのである。

このような活動様式を取り入れた理由の一つに、「知」のありようを問い直すという目論見があった。知識と実践、学習と生活が切り離され、人々のあいだに不平等を引きおこし、専門家支配に奉仕しているこんにちの「知」に対する批判があつたのだ。

同時代に、同じような考え方のもとに市民運動をしていた科学者に高木仁三郎さん（故人）がいた。反原発の立場から科学技術批判を展開していた高木さんは、その当時、知的努力の好ましい方向づけとして4つのことをあげていた。

不平等を減らすこと

抑圧を減らすこと

自然と人間の関係の総合化

実践を媒介とした知の相対化

今日の「知」の不幸の一つは、専門家（分析知、認識知）と非専門家

（経験知）のあいだの共通の合意や認識が失われていることではないだろうか。それを乗り越えるための知的努力は「新しい知の地平」を切り拓くことでもある。

ちなみに高木さんの「新しい知」のイメージは、「知」が獲得されたとたん「知」として切り離されるのではなく、その風景や生活にとけあつた「融合物」として表現されることが、「知」の生産者の表現としてふさわしいというものだった。

科学と文学の境界がとりはらわれ、科学であり文学であるような「作品性」をもつ「知」として表現されることをめざしていたといえるだろう。

新しい美の地平

混迷する時代を切り拓くためには、旧いパラダイムから新しいパラダイムへの転換が必要であることは多くの人々が認めるところである。そのためには「新しい知」の探求と同時に、「新しい美」の追求が欠かせないと、私たちは考えている。

最近「アートが変わる。社会が変わる」といったコピーがあちこちで見られるようになった。障害のある人たちの詩にメロディーをつけてみんなが歌う「わたぼうしコンサート」「わたぼうし音楽祭」を生みだし、29年間、音楽の力を目のあたりにしてきた私たちは、そのコピーのいつている意味を十分すぎるほどに感受できる。

現在も、そこを出発点として芸術の力で社会を変える試みをはじめている。それが私たちが今取り組んでいる「エイブル・アート・ムーブメント」(可能性の芸術運動)である。「エイブル・アート」とは、新しい文化をつくりだす市民の自律的な力という意味だが、その手はじめとして、新しい視座で「障害者アート」を見直す運動を展開している。

この「エイブル・アート」のコンセプトをつくるにあたっては、宮沢賢治の「農民芸術概論」から多くの示唆を受けた。この小論文の序に、宮沢賢治の思想の根幹をなしているといわれる「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という有名な言葉がある。

曾^かつてわれらの師父たちは乏^かしいながら可^{かな}成^{なり}樂^れしく生きてゐた／そこには芸術も宗教もあつた／いまわれらにはただ労働が生存があるばかりである／宗教は疲れ近代科学に置換され然^{しか}も科学は冷く暗い／芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した／……／いまわれらは新たに正しき道を行きわれらの美をば創らねばならぬ

宮沢賢治によれば、芸術とは、個人または集団にとつて、その取りまく日常的状况をより深く美しいものへ変革する行為である。

そこに着想を得た私たちは、「アートには人間が生きることを助ける役割がある」と考え、芸術の社会化・社会の芸術化を運動として進めている。これは「新しい美の地平」を拓く取り組みといえるだろう。

このような私たちの取り組みを、美術ジャーナリストのジュリア・カセムさん(英国王立美術大学ヘレン・ハムリン研究センター)は、次のように評価している。

エイブル・アート・ムーブメントの核心にあるビジョンは、自立しかつ相互依存できる個人またはグループが、多種多様な解決策をもちあわせ、互いに援助しあうネットワーク化された新しいコミュニティの形成です。

開かれた共同体であつてはじめて、これまでの方法や、教育や福祉、医療の専門家などによる相矛盾する意見によって曖昧にされてきた、障害のあること、創造力、就労の機会、自立に関する価値観を再定義することができ、実際に行ってきたのです。

専門的な実践を重ねつつも、理想や熱意をもつ人誰でもが自らの居心地のよいレベルで参加できるネットワークとして基盤を維持し続けてきました。²⁾

これはエイブル・アート・ムーブメントについてのコメントだが、「たんぼの家」の活動についてよくいいあてているように思う。

人間が生きやすい社会

「人間は開かれたやさしい存在でありたい」という一人ひとりの願いがどのように集積し、どのように実現していったか。その道のりを振り返ってみると、それがかたちとなっていくには「哲学」というものがいかに必要であるかを改めて感じる。ここでいう「哲学」とは、「世界の何を痛みとし、世界の何を願いとするか」という問いかけから生まれてくるものである。そこから「世界にたいする大いなる希願を興す」（宮沢賢治）ことができるからだ。

簡単にいえば、「大いなる希願」をかたちにするには、どんな社会が望ましいか、どうして生きていくのかを考える社会的判断力が必要であるということである。

私たちの今の関心事は、人間が生きやすい社会をどうつくっていくかというところにある。現代社会では、生きにくいと感じている人は少なくない。たとえば自殺による死亡者は交通事故の3倍にもほり、年間3万人以上が亡くなっている。精神的ストレス、過労、リストラ、経済的理由な

*2 「トヨタ・エイブルアート・フォーラムから考える エイブル・アート・ムーブメントのこれまで」
これから（02年、トヨタ自動車株式会社「エイブル・アート・ジャパン」より

どによって生きることには絶望しているのだ。

「とにかくこの世は生きにくい」といったのは日本の作家、夏目漱石だが、『草枕』のなかで「この世をつくったのは他ならぬ人間だから、その人間が住みにくいところを、くつろげて住みやすくしなければならぬ」と述べている。

人間が生きやすい社会について、イギリスの作家、ジョージ・オーウェルは「思いやりのある態度と正義のある社会」と書いている。人間的な意味で何が正義かを考えている社会に、人間らしい思いやりがあれば、苦しい時代であっても生きていけるといふことだろう。

その「正義」とは、アメリカ同時多発テロ以降に声高に叫ばれている「正義」といったものではない。それとは逆の、ホスピタリティに根ざす「倫理」に近いものと考えられる。

「思いやりのある態度」とは、ケアのことである。ケアとは一般的に、看護、介護、介助、心の癒しといわれているが、ほんらい人間と人間の関わりであり、人間と人間の信頼を築く営みである。

しかし現実には、人間と人間のつながりが分断され、多くの人々が孤立化している状況にある。しかも人間は今や搾取の対象でさえなく、排除の対象となりつつある状況が進んでいる。

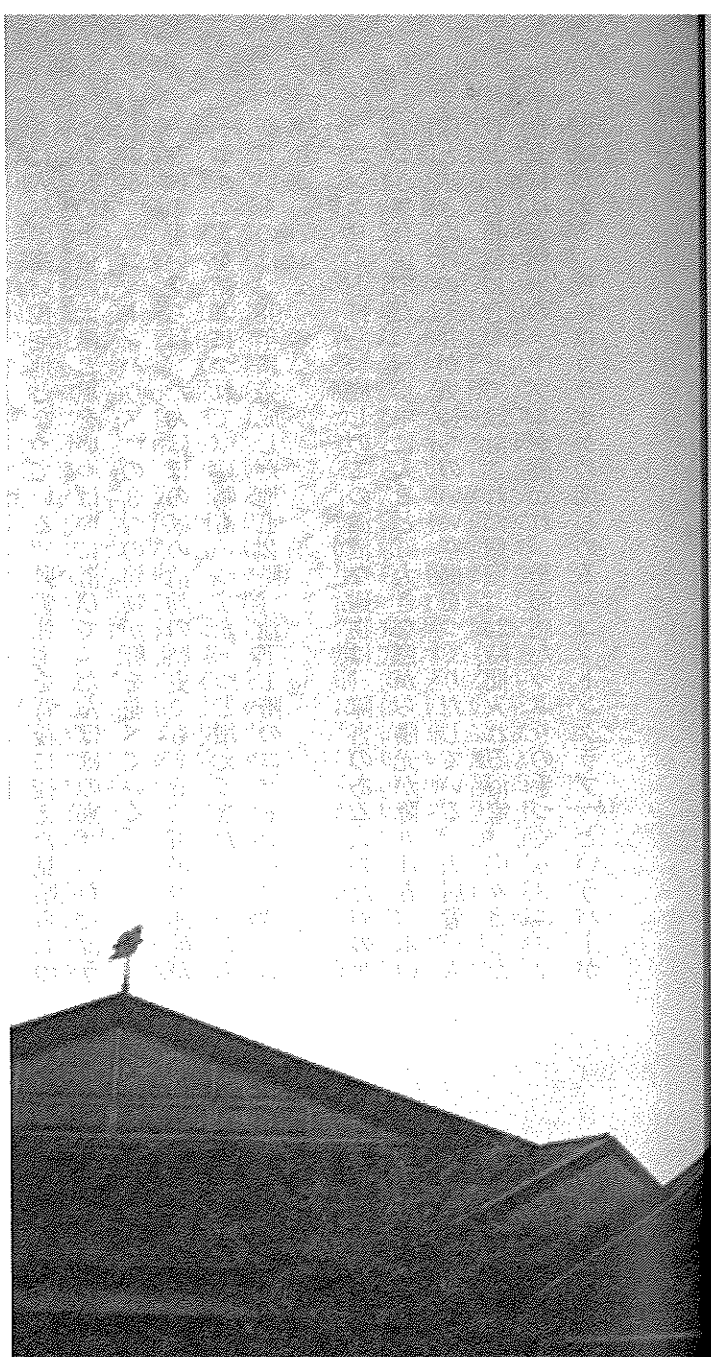
そういう意味では、現代は「寂しい時代」であり、私たちは「寂しい社会」で暮らしているといえるだろう。これは人類史上でもはじめての体験であるといわれている。今、私たちが取り組んでいる「ケアする人のケア」の研究で協力を得ている大阪大学大学院教授（臨床哲学）、わしだきよかず 鴛田清一さんは「寂しい時代に生きる知恵」というインタビューで、

「今、ここにいる意味が見つからないと生きていることが苦痛になる。日本のような無宗教的な社会では、誰もが生きる意味を真剣に考えざるを得ない。生きる意味をもつには、他人にとって自分はどういう意味があるのか考えればよい。自分は他人にとつてなくてはならない存在という感覚があれば、生きるのほそんなに苦しくない」と語っている。

そして鴛田さんは、21世紀を生きる市民の基礎体力として「哲学とケア」が重要であることを指摘している。さらに、自分の思考を組織にゆた

*3 毎日新聞 02年7月
30日

ねずに、市民として個人的に関与していくことの大事さを強調している。私たち人間は一人ひとり弱い。弱々しいうえにいるんな不幸におちいりやすい存在である。しかし、その存在にふさわしい素質が「やさしさ」というものではないだろうか。やさしい心こそ、自然からの人類の授かりもの。そして真にやさしい人間だけが、ほんとうの寂しさを知っているといえるだろう。寂しさとの闘いが、さらにいつそう深い寂しさ＝絶望を知っていく。しかし絶望の果てを知れば、私たちは生きている限り楽しく生きようとする。そこから希望が湧いてくる。こうして生まれた根拠のある希望を組みあわせてゆく営為があつてはじめて、次の世界が開かれるのではないだろうか。



第1章

人が人として生きられる場所